

日英ソーシャルワーク・セミナー報告 (1)

生 江 明

日英二国間セミナー実行委員会代表

『NPM 政策の衝撃と専門職ソーシャルワークへの視点：日英の経験の比較研究』（『The Impact of New Public Management Policies and Perspectives on Professional Social Work: A Comparison of British and Japanese Experiences』）と題するセミナーを、イギリスと日本の共同研究者を得て、二度にわたりそれぞれの国で開くことができた。この共同セミナーは、2010 年度日本学術振興会およびイギリス ESRC (The Economic and Social Research Council) との共同採択を得た二国間交流事業共同セミナーである。私たち日本側研究者（後述）と協力連携をとったのは、スターリング大学の Dr. Iain Ferguson (Senior Lecturer in Social Work, University of Stirling) を代表とするソーシャルワーク研究グループである。その他の主たるメンバーは、Dr. Michael Lavalette (Associate Professor in Social Work, Liverpool Hope University), Dr. Mark Baldwin (Senior Lecturer in Social Work, University of Bath), Dr. Sarah Banks (Professor in Community and Youth Work Studies, Durham University), Dr. Rona Woodward (Lecturer in Social Work, University of Stirling) である。

第一回目のセミナーは、2010 年 9 月スコットランドにおいて開催され、今号で紹介する 5 名の日本人研究者の報告を主たるものとした。これらの報告に対してイギリス側共同研究参加者よりの質疑・コメントリが加えられ、活発な検討がなされた。日本側報告者は、小坂啓史（愛知学泉大学コミュニティ政策学部准教授）、安藤洋（椋山女学園大学人間関係学部准教授）そして日本福祉大学から、原田忠直（経済学部准教授）、伊藤文人（社会福祉学部准教授）そして代表の生江明（福祉経営学部教授：当時）である。これには参加できなかったが、日本側研究者は、坪洋一（日本女子大学人間社会学部准教授）、金子充（立正大学社会福祉学部准教授）の両氏を入れた 7 名が日本側研究者ということになる。

第二回は 2011 年 3 月に、日本女子大新泉山館を会場に、同大学人間社会学部社会福祉学科との共催で、イギリス側 4 人の共同研究者を迎えて行われた。岩田正美教授の基調報告に引き続き日本セミナーに関しては、次号にて報告させていただく予定である。

本研究およびセミナーの目的は、次の 3 点である。第 1 に、過去 20 年以上に及び日英両国で導入・展開された社会経済政策の原理と方法論がニュー・パブリック・マネジメント (NPM) という経営哲学であり、これに基づいて、実際の社会福祉供給体制が転換されてきたことを事実として確認すること。第 2 に、この運営原理に基づいて、専門職としてのソーシャルワークの実践方法がどのように変容してきたのかを、歴史的/臨床的な検証を踏まえた上で、その帰結を明らかにすること。第 3 に、この帰結を受けて、両国の専門職ソーシャルワーク実践を取り巻く社会環境の変化を反省的に振り返りつつ、主に、「当事者主義」に基づく「反抑圧主義的ソーシャルワーク実践 (エンパワメント・ソーシャルワーク)」の諸潮流の興隆と可能性を展望していくことにある。

日英両国は過去 20 年以上に渡って、NPM に基づく行政改革路線が継続してきた。とりわけ、その原理が社会福祉領域に浸透した契機となったのは、英国では、1990 年に成立した「NHS (National Health Service : 国民保健サービス) およびコミュニティケア法」の成立である。日本では、同時期に少子高齢化問題に対する政策的対応がようやくなされ、在宅サービスを主軸とするサービス供給量は増加傾向に転換した。しかし、英国から遅れること約 10 年を経て、英国同様のサービス供給方法であるケアマネジメント方式が導入され、それは介護保険制度や自立支援制度へ結びついた。両国のこの動向は、タイムラグがあるものの、基本的には同一の趣旨をもって、社会福祉供給体制とそれを専門職ソーシャルワークへ適用するものであった。

それらは、次の 5 点である。専門職が歴史的に培ってきた熟練的な経験と技術よりも、社会福祉従事者のパフォーマンスのミニマムスタンダードを担保する意味としてのマネジメント能力を重視し、福祉対象者に対応することが奨励されたこと (アセスメントとケアプラン方式の採用によるサービスの定型化を基礎とすること)、サービスの供給と効果測定を量的に把握する、エビデンス・ベースな事業や実践の展開を奨励し、それを評価するシステムを導入したこと、従来の行政主導型による介入措置的实践を戒め、福祉対象者という視角を去って、サービス利用者主導による契約主義になじむような内部 (準) 市場 (quasi-market) を社会福祉領域で確立すること (福祉の複合構制 : mixed economy of welfare の創造と育成)、サービス利用者をサービス消費者と位置づけることから、サービス運営に際して、徹底的な効率観念の樹立とコストカットが奨励され、それを実行する報酬体系がサービス供給および供給組織 (行政直営方式以外のサービス供給組織とそこで働く専門職を含む) に連動し整備されたこと、以上の目的に沿うような専門職養成が模索され始めたこと (カリキュラム変更)。

さて、以上の特徴と傾向は、一方では一部のサービス利用者の効用を高めたが、他方で経済不況の深刻化に伴う貧困や格差、社会的排除の更なる進行によって、従来の福祉対象者観も転換したため、かえって混乱を現場にもたらしたという指摘も多い。

しかし、同時に、福祉サービス利用者の当事者性を踏まえた上で彼らと専門職が協働する形 (user-involvement approach) で実践を切り拓く「反抑圧主義的ソーシャルワーク」実践が興隆しつつあり、ソーシャルワークの新しいモデルが養成課程においても模索されている。日本で

も専門職ソーシャルワーク以外の多様な職種との連携によるネットワーク作りが進行しており、時代を見据えた新しいソーシャルワークのモデルが求められている。

世界同時不況の発生は、マネジメントや効率といわれる言説や社会運営のあり方の再検討の必要性を示唆している。本セミナーは直接的には、マネジメントという原理や言説が社会福祉領域と専門職養成課程へどのような影響を与えたのかを複眼的に検証するものである。今後、政治的変動が進行するにつれて、NPM がもたらした多様な功罪が検証されていくものと考えられるが、本セミナーは社会福祉の実践の世界から現代社会を分析する視点と方法を提起する試みの一つになると思われる。

補注：生江孝之と私

第一回目の日英セミナー開催地グラスゴーは、私の祖父・生江孝之が1901年にアメリカ・ボストン大学大学院を終えた後で、社会事業（ソーシャルワーク）の勉強のために渡った地であった。当時のグラスゴーは世界の工場として、産業革命に続くイギリス工業化の中心地であり、彼によれば「世界最悪の都市」であった。そこで働き暮らす人びとは都市の繁栄とは裏腹に、乳児死亡率世界一など、過酷な日々を過ごしていた。彼はその最悪の地に赴き、そこで「世界最良のソーシャルワーク」を学ぼうとしたのである。その後、彼は「田園都市」構想の本拠地ヨークシャーに学び、ロンドンに至り、セツルメント運動を学び、日本に帰国し、その成果を日本の地で活かそうと試みた。柳田国男とともに日本各地を歩き、留岡幸助や山室軍平と親交を結び、大正8年には日本女子大の教員に着任し、それまでの学びを『社会事業綱要』にまとめた。彼は昭和18年までその教授職にあって、日本の社会事業の様々な局面に関わり、その後、青山学院理事長の職に転じた。私の手元にある昭和4年版のこの著書の多くのページは、改訂版のための書き込みが小さな文字でぎっしりと埋まっている（昭和11年に加筆されたもの）。グラスゴーに着いた晩に、その古びた『社会事業綱要』にホテルで目を通しながら、およそ110年前彼が暮らした街に私が来ていることに何かの巡り合わせであろうかという不思議な思いに駆られるのを感じないではいられなかった。

アダム・スミスが歩いたであろうグラスゴー大学の古い石畳を歩きながら、そして、町中にある19世紀末からの建物や工場の傍らを歩きながら、私は歴史や理論が、まさに人びとの時間と空間の中に生きながら、そして伝わりながら、今も私たちに繋がっていることを思わざるを得なかった。そして、この共同セミナーはここ20年余りの新自由主義の隆盛の中で、そもそもの社会事業がどのような変貌を迫られてきたのか、そしてそのことが私たちの暮らす社会そのもののいかなる変質・変容を示すものであるかを考える旅となった。

私にとって、激動の1970年代以降、日本政治思想史研究のために東北地方の日本の農村を歩きまわり、さらに40代からは自然災害や戦争からの復興支援のためにアジアやアフリカの各地で働いてきた。それら40年にわたる自分の軌跡が、コミュニティ・ソーシャルワークと呼ばれる領域の仕事に関わり続けているということを実感したのは、あまり古いことではない。祖父の

著作権の管理をする役割を持つてから、ある意味では初めてその著作を読み返し始めている私は、自分が祖父の仕事の後を追っているように思え、今回の日英共同セミナーに不思議な巡り合わせを感じている次第である。

社会事業という言葉が、社会福祉という用語に置き換えられてきた歴史の中で、WORKという言葉が、LIFEWORkのworkから、賃仕事PIECEWORKのworkへと転じている。自称専門家の素人たちがプロと呼ばれるのは、それでもお金を稼げるからであろうか。それとも、資格制度によって業務の独占を制度化した時から、稼ぎのある者だけが専門家であるとみなされ、稼ぎ=pieceworkへと転化したのかもしれない。祖父もまた資格を持たない者であった。



日本側報告者 原田准教授
at Stirling Univ.



英国側コメンテーター
Dr. Sarah Banks. J at Stirling Univ.



英国側コメンテーター
Dr. Iain Ferguson at Stirling Univ.



日英セミナー共同研究者
at Glasgow Univ.